

羽ばたけ! TUT2020 報告書

3 系 (M) 1 年 氏名 内山 慎太郎

参加プログラム	オーストラリア研修
研修先機関	University of Adelaide, Australia
プログラム名	Global Jinzai Program
研修内容	
(本文中の図は、本研修で撮影した写真である。) 1 参加の目的や動機 私は高専ないし大学の教員になることを目指している。TUT が SGU に採択されており羽ばたけ！プログラムを実施していることは、我が国においてグローバル人材育成の必要があることが背景にある。産業界からの要請も大きいと考えられるが、一方で私はアカデミアにおける「グローバル人材を育成する人材」に目を向けた。今後の社会において、私が学校の教員として果たすべき役割の一つとして、「グローバル人材を育成する人材」であることが求められると考えた。このためには自らがグローバル人材である必要があることは当然である。これまでに数回の国際会議参加（タイ、インドネシア、アメリカ）や海外実務訓練（タイ）を経験しているがアジア圏が中心であり、英語を母語とする国での経験に乏しい。そこで、この研修を通して、英語を母語とする国の考え方や、コミュニケーション方略の違い、オーストラリアの文化を学ぶことで、グローバル人材が身につけているべき多角的な視野を鍛えたいと思い、本研修の受講を志願した。 2 研修内容 3 週間の研修では、語学力を身に着けるための“ELC Structured Preparation Session”と、現地学生のガイドとの“Project Work”とが行われた。本研修には本学からの参加者のほか、関西学院大学と岡山大学の学生が参加した。研修の大半は 3 つのグループに分かれてそれぞれグループワークをする形式で進行し、私は A グループに属して活動を行った。本研修に設定された目的は、英語運用能力の向上と、異文化理解を深めることであった。 2.1 ELC Structured Preparation Session ELC Structured Preparation Session は、English Learning Centre (ELC) の教員である Amy Ruth Brown 氏による講義であり、期間中の月、水、金曜日に行われた。語学力向上を目的とした講義であり、例えば可算/不可算名詞およびその比較級の使い分けや、英語による丁寧な質問や要求、提案の方法を学ぶものであった。これらの講義は基礎的な内容ではあるものの、後述する Project Work に向けて必要な英語運用能力を確保するために設定されたものであった。加えて、オーストラリア英語特有のスラングなどについても講義がなされた。また、本セッションではグループ別で Project Work の振り返りや準備作業も行った。	

2.2 Project Work

Project Work は、Student Guide（現地のガイド学生、TA に類似）との協働作業であり、期間中の火、木曜日に行われた。各グループに 2 名の Student Guide が割り当てられており、彼らと次の取り組みを行った。

Amazing Race は Adelaide 市内、特に University of Adelaide 周辺の街を Student Guide と共に散策しながら行うゲーム形式の取り組みであった。我々は Student Guide が街中で見つけた紙に書かれたお題に答えていき、正解すると次の場所に案内してもらえる形式のゲームであった。研修開始翌日に行った取り組みであるため、グループメンバーとの協働作業によってアイスブレイクの役割を果たすと同時に、Adelaide の街を Zoom 越しではあるが見て回り空気感をつかむことができた。

Online Homestay は Adelaide 近郊に住む家族のご自宅を案内してもらう取り組みであった。我々は事前にグループ内で質問を準備し、見せてもらったお宅について質疑応答を行った。私が属した A グループでは Adelaide 郊外に住む老夫婦のご自宅を見せてもらい、オーストラリアの家が日本の家とどのように違うのかなどを確認することができた。

Campus Visit は University of Adelaide の North Terrace Campus を Student Guide が紹介しながら、その場にいる学生に我々が準備した質問でインタビューを行う取り組みであった。通信環境が不安定であるなどの要因により、実際のインタビューは Student Guide が行い、我々はその会話を聞く形式であった。University of Adelaide の人種多様性や、日本にはない大学内のバー、建築物のスタイルなどを Student Guide の大学紹介によって見る事ができた。さらにインタビューからは、オーストラリアで学ぶ学生たちの生の声を聴くことができた。

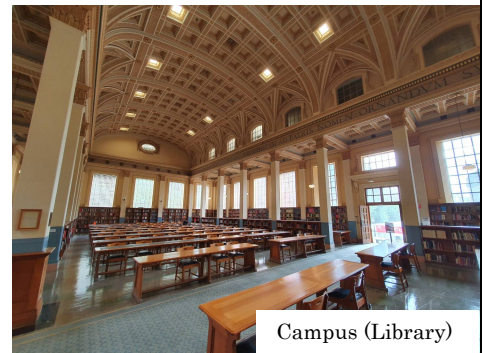
Rundle Mall Interviews は Adelaide 市内にある Rundle Mall と呼ばれる商店街を Student Guide が案内し、さらにその場にいる人々に我々が準備した質問でインタビューを行う取り組みであった。上で述べた Campus Visit と同様、実際のインタビューは Student Guide がおこない、我々はその会話を聞く形式であった。Rundle Mall は上で述べた Amazing Race でも訪れているが、街やオーストラリアの店の雰囲気、商店街



Rundle Mall



Campus (Uni bar)



Campus (Library)



Rundle Mall

に点在する芸術作品、活気にあふれた商店街の様子を見ることができた。さらにインタビューからは、オーストラリアに住む人々の生の声を聴くことができた。

Reverse Tour はこれまでで述べた取り組みと逆で、参加学生が日本について Student Guide に紹介する取り組みであった。私が属した A グループでは、岡山大学の学生が後樂園を、関西学院大学の学生が関西学院大学を、私が自宅（祖父の家に住んでいるため、昭和からある日本らしい家）をそれぞれ紹介した。

2.3 Final Presentation

最終日には、期間中に得た知識などを基に最終プレゼンをグループごとに作成し発表した。本研修で設定された目的である、英語運用能力の向上と、異文化理解について評価されるものであった。私が属した A グループでは、オーストラリアと日本の違いや類似点について、自然環境、ダイバーシティ、自由の 3 つをテーマに掲げ発表を行った。発表内容は、上段で述べた Project Work で現地を見て回り、現地の人々へのインタビューで得た様々な知識を基に行い、特に自然や動物について、環境に対する考えについて、ダイバーシティについて、学生生活について、街の様子について、それぞれオーストラリアの違いや類似点を述べた。私はこのうちダイバーシティに関する内容を担当した。

3 研修の成果、研修で獲得したもの、当初設定した行動目標の達成度、問題点

3.1 研修の成果と獲得したもの

3.1.1 設定した「獲得したいもの」

研修に参加するにあたり、グローバル人材が身につけているべき多角的な視野を身に着けることを目標とした。研修プログラムでは、” Greater understanding of cross-cultural communication ” が目的の一つとして掲げられていた。学習科学あるいは教育工学の分野では、文化の違いによって教育実践の効果が異なることが知られている。このような背景から、将来教員となったときのために、留学生対応や海外校での教育において、他国の人々が持つ物事の捉え方や考え方が日本人とどのように異なるかを知る必要がある。しかし、私はこれまでアジア圏を中心に海外での活動は行っていたものの、英語を母語とする国での経験はなかった。そこで、研修プログラムでの現地学生との協働作業を通して、彼らの物事の捉え方や考え方が、日本人である自身の持つそれらとどのように異なっているかを知りたいと考えた。また、これを知ることによって自らの物事の捉え方や考え方を見つめなおし、得たものを取り入れることで、グローバル人材としての物事の捉え方や考え方、つまり視野を多角的にしたいと考えた。

3.1.2 成果と獲得したもの

グローバル人材が身につけているべき多角的な視野を身に着けるという点では、オーストラリアの文化を学ぶことができた。具体的には 2 国間の文化比較を主題とした最終プレゼンを作成し、成功させることができた。最終プレゼンで述べた内容を抜粋し、獲得した知識として以下に示す。

オーストラリアは自然にあふれており、街と自然の距離が非常に近い。そのため野生動物に遭遇することも多く、Online Homestay で現地夫妻に聞いた話ではコアラが夜間鳴いてうるさいなど、日本にはない自然環境と生活の一端を知ることができた。

オーストラリアでは節水に努めなければならないということを知った。水不足に陥ることが多いため、シャワーの利用時間を制限するようテレビなどでも繰り返し呼びかけがある。一方でごみの分別は日本よりも厳しくなく、3種類のみである。また、街のいたるところにごみ箱が設置されており、Student Guide の一人は日本に訪問したときごみ箱を探すことが大変であったと言及するほどであった。

オーストラリアは西欧圏からの移民でほとんどが構成された国家であることから、人種多様性が非常に高い。オーストラリア人であっても様々な人種が居る。そのため Project Work で行ったインタビューでは、出身を聞くまで、その人がオーストラリア人であるかそうでないかを全く判別できなかった。特に University of Adelaide は留学生の割合が高く、判別がさらに困難であった。Rundle Mall Interview においても、インタビューした内 2 割程度が外国人であった。

学生生活の面では、大学内に酒を提供するバーがあることに驚いた。オーストラリアでは 18 歳以上で飲酒できるため、大学にバーがあることは自然だということだった。また、学生と教員の関係性についてインタビューで尋ねたところ、ほとんどの学生が友好的な関係であると答えた。オーストラリアでは学生と教員がファーストネームで呼び合うことが一般的であり、これは日本を含むアジア圏の国々とは全く異なると感じた。一方で、学生らが大学を選ぶ基準を尋ねたところ、日本と変わらないイメージであった。大学が家から近いから、たくさん友達をつくれそうだから、興味のある授業やプログラムがあるからといったものであり、日本人学生も同様の意識を持っていると考えられる。ただし、日本に存在する「学歴」への意識は無いようであり、この点については大きく違うと感じられた。

獲得した知識とは別に、英語運用能力への自信がついたと感じる。研修では様々な取り組みをすべて英語で行った。私はこれまでグループワークや日常会話といったところで英語によるコミュニケーションを行うことがあまりなかったため、この経験は自分にとって大きなものである。また、ELC Structured Preparation Session では、オーストラリア英語特有のスラングや特徴などについて知ることができた。オーストラリア英語は省略スラングが多いことや、非常に流ちょうで喋りが早いことなどが特徴である。



Opposum(at univ.)



Bins (at univ.)



Uni bar

設定した目標のうち「彼らの物事の捉え方や考え方が、日本人である自身の持つそれらとどのよう
に異なっているか」は獲得できなかった。目標を設定する際には研修の詳細な内容がわかっていなか
ったため、「現地学生との協働作業」が対等な立場でディスカッションをするなどの取り組みである
と考えていた。しかし、実際には現地学生は我々参加学生のガイド役であったため、学生と教師のよ
うな関係性であり、私が求めていた、より密な協働作業を通したコミュニケーション方策の違いを知
ることはできなかった。ただし、与えられた環境の中で最大限に目標を達成するべく行動した結果、
上述の成果を得ることができており、自らの視野は広がったと感じられている。

3.2 当初設定した行動目標の達成度、問題点

3.2.1 設定した行動目標

空いた時間などに、英語ネイティブの人に積極的に「雑談を」持ちかけることを行動目標とした。
研修プログラムでは、現地学生との協働作業が予定されていた。私はこれまで、アカデミックな場
での英語コミュニケーションを何度か経験しており、英語における“硬い”コミュニケーションを学ん
できた。一方で、友好的な態度での“緩い”コミュニケーションは経験に乏しかった。国際的に協働
作業を行う場合や、英語を用いた教育を行っていくうえでは、“硬い”コミュニケーションは当然のこ
とながら、より強い信頼関係を築き上げていくために“緩い”コミュニケーションの能力が求められ
る。研修プログラムの協働作業そのものは比較的“硬い”コミュニケーションを行うことが想定され
るため、プログラム中の空いた時間に積極的に「雑談」を持ちかけることで、自身に不足している英
語での友好的なコミュニケーションの能力を補うことに努めることとした。少なくとも、一日に一人
以上との雑談を行うことに努める。また、現地の人々の生活を見学する機会があるため、発言が可能
であれば現地の方に気になったことをすべて質問していくこととした。

協働プロジェクトの活動をリードしていくことを行動目標とした。国際的に協働プロジェクトを行
っていくためには、日本人には足りていないといわれる“積極性”が必要になる。言語の壁は積極性
を損なわせる大きな要因であるが、それを理由にして国際的に活躍する機会を失うことは望まれない。
本研修での協働プロジェクトを練習台とし、グループ内の統制をとる、プロジェクトにおけるタ
スクを積極的に引き受ける、プロジェクトメンバーとの友好関係を築くなど、積極的な活動に努める
こととした。このことによって、これまでに様々な機会で培ってきたリーダーシップを国際的な場で
発揮するための練習を行うこととした。

3.2.2 達成度と問題点

以下、2つの行動目標についてそれぞれ達成度を5段階で示し、その理由を述べる。5段階評価は
1を「全く達成できなかった」、5を「完璧に達成できた」とする。

積極的な雑談は、5段階評価のうち3とする。まず、できる限り Amy や Student Guide と会話
をするように心がけ、実際に他の参加学生よりも多く会話できたと考えている。自分が発話できるイ
ンタビューや、Student Guide とのやり取りでは積極的に発言を行い、その中に雑談を交えること
ができた。また、協働グループで作成した LINE グループ上で日常会話を文字ベースで行うこともで
きた。しかし、そもそも「空いた時間」というものが存在しなかった。Zoom によるオンラインセッ

ションでは決められたタイムスロットの中で様々な取り組みを行い、それ以外の時間は完全にコミュニケーションが遮断される状態であった。また、オンラインセッション特有の問題である、同時発話可能人数が1人であるということも影響した。さらに、英語ネイティブの対話相手がほとんどいなかった。Project Work中は雑談をする時間的余裕は与えられておらず、雑談する時間があるタイミングには日本人学生しかいない状況のみであった。ただし、本研修のメインプログラムとは別に、ELCが主催する英会話コミュニケーションの場は用意されていた。これに参加することで行動目標をより高いレベルで達成できると考えていたが、予定が合わず参加できなかった。

協働プロジェクトの活動をリードしていくことは、5段階評価のうち4とする。まず、活動をリードしていくことについては5段階評価で5としてよいほどに活躍できた。グループワークを開始するときには必ず自分から発言をはじめ、時間配分や発言を促すなど活動をリードできた。プロジェクトにおけるタスクも、例えば共同編集するオンライン掲示板の準備や、提出すべきワークシートの作成、最終プレゼンの統括といった面で積極的に仕事を引き受けることができた。しかし、協働プロジェクトで実際にプロジェクト活動を行うメンバーは日本人のみであった。このことから国際的なメンバーをリードしていくという目標は達成できておらず、評価を1段階下げることとした。

4 今後の目標、課題、当初設定した「研修後に実践する行動目標」の見直し

4.1 当初設定した「研修後に実践する行動目標」の見直し

4.1.1 設定した行動目標

留学生との会話を積極的に行い、彼らの文化を知るよう努めることとした。3.1.1節では、本研修における獲得したいことを述べたが、これは研修後も引き続きより良くすることができる。その一つの方法として、本学に在籍している留学生との会話が挙げられる。日頃利用している学内のいたるところで留学生を見かけることができるが、現在はコミュニケーションに不安があるため積極的に話しかけることができていない。3.2.1節の行動目標を達成することでコミュニケーション力の増強が見込まれ、本研修後は彼らとの会話を積極的に行う自信がつく。したがって、本学在学の留学生との会話をより積極的に行うことで、自分が彼らの文化を知ることはもとより、彼らに日本の文化を伝えたり、彼らが気軽に頼ることのできる日本人学生として振る舞うよう努めることとした。

周りの同期や後輩に対して海外に目を向けることの重要性を伝え、彼らに新しい考え方を獲得してもらえよう努めることとした。自身の経験は自身に留めることなく周りの人々にその成果を示すことでより価値を持つ。大学の支援を受けて研修に参加するからには、その研修で得られたものを周りの人々に示すことで大学全体の利益に少しでも貢献できるようにするべきである。そこで、少なくとも研究室において、海外実務訓練への参加や、国際会議への出席を促す。このとき、自身の経験をもとに話したり、相談を受けることで、彼らの海外での活動に対する心理的な障壁を少しでも取り除くことを目指すこととした。

4.1.2 見直し

留学生との会話を積極的に行う行動目標では、3.2.2で述べたように本研修で得られなかった「雑

談」をさらに積極的に行うよう心掛けたい。3.1.2 で述べたように英語でコミュニケーションを行うことへの自身が増した。また、これまでの経験から、英語による会話を数か月行っていないとうまくしゃべれなくなることを自覚している。これらから、本研修で身に着けた英会話への自信と能力を維持し、本研修で得られなかった“緩い”コミュニケーションの能力を高めていきたい。

自身の周囲に新しい考え方を獲得してもらう行動目標は特段修正の必要はないと考えている。また、本報告書にできる限り詳細に記述することもこの行動目標を満たす一つの行動であると考えている。

4.2 今後の目標及び課題

「彼らの物事の捉え方や考え方が、日本人である自身の持つそれらとどのように異なっているか」の獲得を、今後の目標としたい。この目標を達成するにあたっては、2つの段階を経る必要があると考えている。

目標を達成するためには4.1節で述べた以外にも、どのような活動を行えばよいか再考する必要がある。本研修参加前はオンラインプログラムでもこの目標を達成できるものと考えていた。しかし、オンラインプログラムではこれまでに述べたように、オンライン特有の制約によって目標を達成するための行動を行えなかった。したがって、本学内や豊橋市内などで達成可能な行動を考案し、目標を満たす必要がある。ただし、オンラインプログラムでは、目標を満たすものが絶対にはないと言えないため、オンラインプログラムでの目標達成も視野に入れて考える必要がある。

目標を達成するための行動を実際に起こす必要がある。これは、4.1節にて述べた行動目標の履行でおおむね達成できるように思う。ただし、今後さらに多忙になっていく中でどのように学業との折り合いをつけて行動をするかを考えなければならない。

5. その他感想など

オンライン留学プログラムへの参加を通して、自身の研究に関連する知見と経験も得ることができた。従来の留学プログラムでは、現地に行き、研修プログラムが設定されていない時間帯は「現地で自由な体験」ができていたと考えられる。一方でオンラインプログラムでは、研修プログラムが設定されていない時間帯はいつもの生活をするということになり、留学で最も重要な他国に赴いているという臨場感が弱いと感じた。言い換えれば、オンラインプログラムではプログラム上設定された目標を達成することについて最も効率的な手法であるが、従来の留学で得られていた副次的なものが得られなくなっている。このことは留学のみならず、教育一般に当てはめて考えられるため、今後のICTを活用した教育に対する貴重な経験として役立てていきたい。

自らの目的を達成するための行動がグループワークを乱す可能性があるため、プログラムの詳細な内容を申請段階で知る必要がある。私は1節で述べたように目的をもって本研修に臨んだ。また、私以外の本学からの参加者も同様であっただろう。しかし、他大学からの参加者が我々と同様に「語学能力向上以外の目的」をもって参加していたかはわからない。このため、自らの目標とプログラムの目標をある程度すり合わせておく必要があると考える。これは上段で述べたようなオンライン特有の

ものであると考えられる。また、本研修への学生としての参加者が全員日本人であったこと、さらに私以外は全員学部生であったことを付記しておきたい。Student Guide は私が申請段階で考えていたような学生と対等な立場の参加者ではなく、TA のような形態だった。また、参加者の中で私がただ一人大学院生であることが特段問題を引き起こすといったことはなかった。ただし、プログラムへの参加学生として学部生が主に想定されている可能性がある。